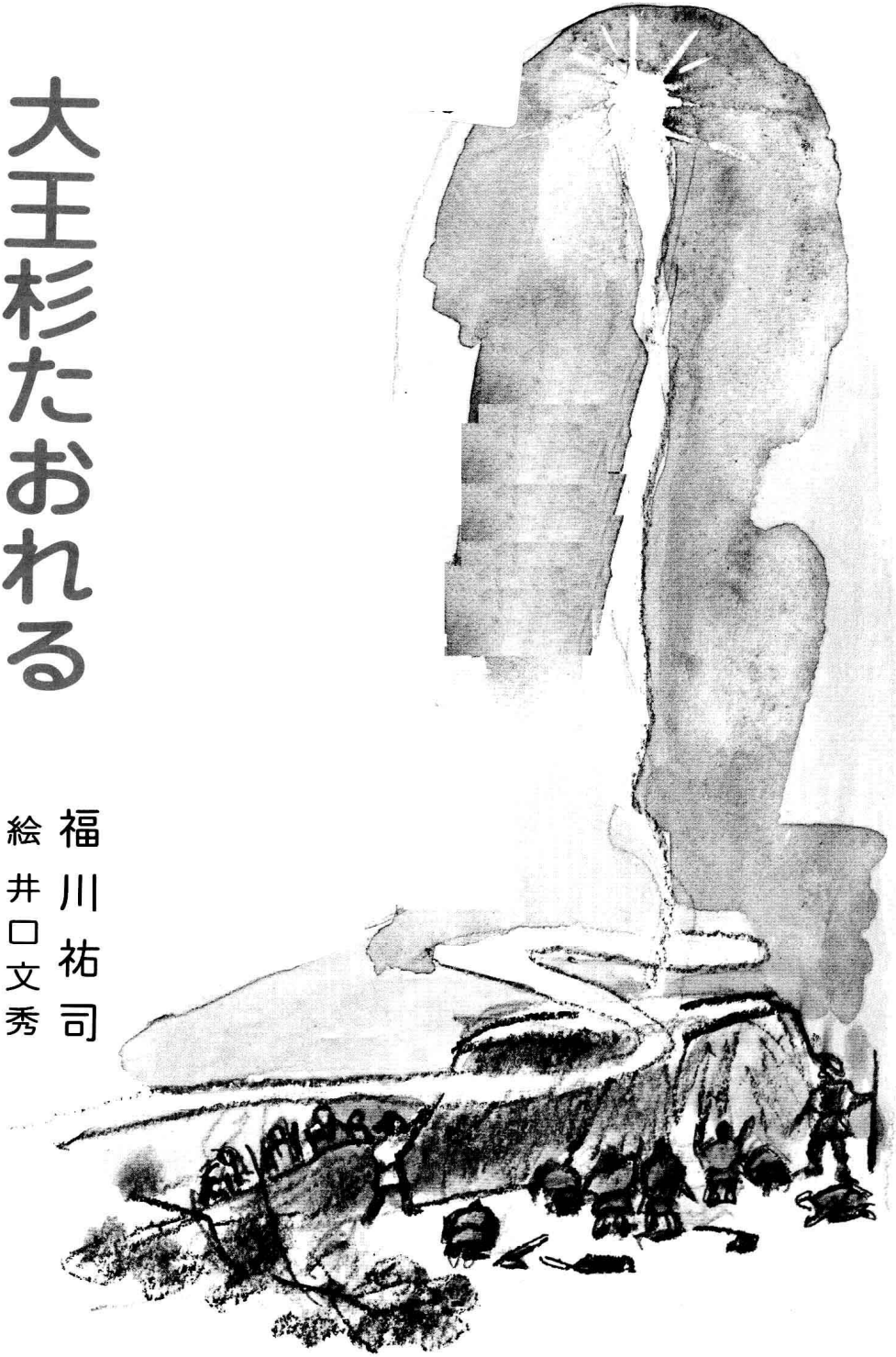
大王杉たおれる

福川祐司
絵 井口文秀

大王杉たおれる

福川祐司
絵 井口文秀



913

福川祐司

大王杉たおれる

講談社　1978

338 p　22cm（児童文学創作シリーズ）

ふくかわ　ゆうじ

大王杉たおれる

昭和53年10月20日　第1刷発行

定価980円

著　者　福川祐司

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112

電話　東京03(945)1111(大代表)

振替　東京8-3930

印刷所　廣済堂印刷株式会社

双美印刷株式会社

製本所　株式会社黒岩大光堂

© 講談社　1978　Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

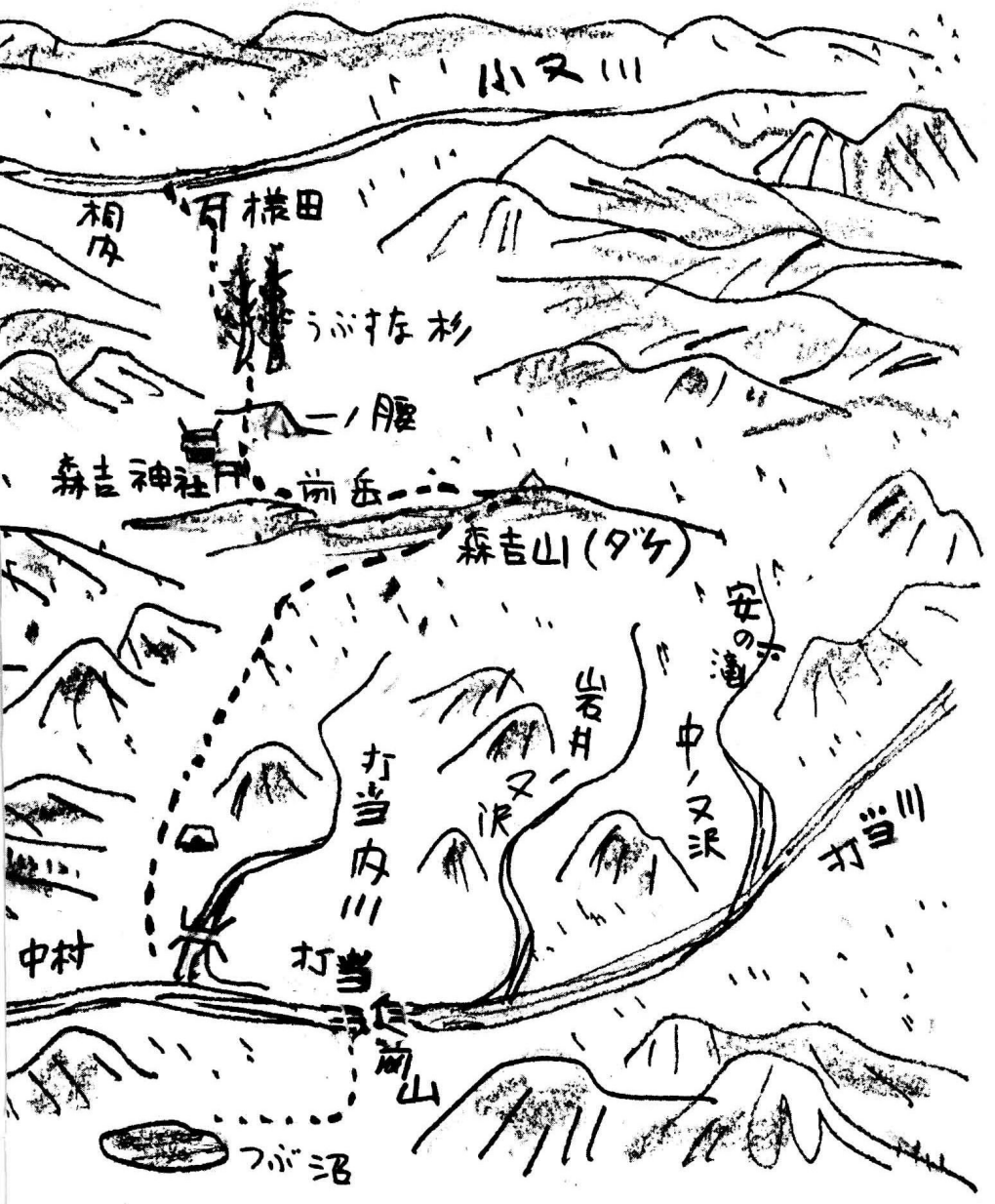
8093-189701-2253 (0)　　（児一）

もくじ

雪のダケごえ……7
やみの中の黒いかげ……20
てで、もどってきてけれやあ……40
あば、どこさいった……57
死んだらすてればええでや……77
あばなぐることなどできねや……102
とことんまでやるでや……123
すまねえ、おれのために……145

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

おればマタギにしてけれ……159
ばかばかしいことでねえぞう……184
おれたすけねえで、どこさいぐ……212
あば、おれに死ねってかい……235
おケイ、き、きれいだなあ……259
おケイよめにほしいでやあ……283
あばやあ、死んだらえぐねや……308
ダケのこだまよ……331


小又川
相内
横田
うぶすな杉
一ノ腰
森吉神社
前岳
森吉山(ダケ)
安の滝
岩井
中ノ又沢
打当川
打当内川
中村
打当
前山
つぶ沼

阿仁川
国鉄阿仁合線
前田
小又
新屋布
細越
根森田
阿仁合
比立内
打当川
戸鳥内

雪のダケごえ

きゅうな山の斜面に、すぎの木立が、きゅうくつそうに、えだを重ねあっておいしげっています。まっすぐのびたすぎの林をななめにぬって、細い山道は、「く」の字形にいくどもおれまがって上につづいています。

朝の八時に、わたしはたった一人で、様田（秋田県北秋田郡森吉町様田）の登山口にあるそばくなまる太づくりの鳥居を出発しました。はつらつとした気分でのぼりはじめて、まだ三十分もたっていないというのに、もう、足につかれを感じて、リュックの重さが苦になってきました。乗りもののべんりな東京の生活が、足こしをすっかり弱めてしまったようです。立ちどまって、一息いれました。

四季をつうじて緑の葉をしげらせているすぎの木にも、注意して目をむけてみると、やはり季節の顔があります。えだの先にかれ葉がやや多くなり、緑の葉が、ほこりをかぶったように色あせて、赤茶色の樹皮のつやが消えたように見えるのは、生長の活動をやすんでいる冬の表情です。

東京は、やっと紅葉がはじまったところでしたが、十一月初旬の秋田の山は、もう冬にはいったと

いってもいいようです。

わずかに秋のなごりが、ところどころですぎの木をとりまいているつたに見られます。つたの葉は、ほとんどちっていますが、ちりおくれた葉が、あっちに二、三まい、こっちに五、六まいと、ちるのをおしむようにのこっています。心臓の形をしたつたの葉は、赤や黄色に色づいて、暗いすぎ木立の中でも、光を発散しているように、あざやかにうきたって見えます。

わたしは、息をすえば、むねの底までしみるつめたい空気の中を、またあるきはじめました。はく息でめがねがくもります。じゃまなめがねをむねポケットにしまい、すこしぼやけたうす暗い足もとに気をくばりながら、のぼっていきました。

道がへいたんになると、ふいにあたりがオレンジ色の明るい光の世界にかわり、まぶしさに軽いめまいのようなものをかんじました。あわててめがねをかけてみると、そこは、葉をすっかりおとしてしまった、からまつの広い林でした。オレンジ色のこまかい葉が、地面を一面におおって、朝の光にあたたかくかがやいています。無数にのびた針のようなこずえが、青い空とやわらかくとけあっています。

わたしは、リュックをはずすと、地面にこしをおろして、たばこに火をつけました。

「地面がふっくらとして、まるでオレンジ色の雪がつもったみたいだなあ……。」

思わず口に出たことばから、ちょっとしたできごとが思いだされて、つい苦笑してしまいました。

様田の宿を出るときのことでした。

「ダケさゆきふたべんて、とちゅうきちけてえてけんひ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

見おくりに出てくれた宿の主人が、人のよさそうなえがおをうかべながら、秋田のことばでいいました。

「はあ、どうもありがとうございます。じゃ、さようなら。」

わたしはあるきだしました。主人が気づかってくれたらしかったので、反射的にお礼をいったのですが、ことばの意味が気になって、わたしはくるっとふりかえりました。

「え？　いま、なんとおっしゃったんですか？」

すこし間があいたのでおかしかったのでしょう。主人は、わらいながら説明してくれました。

「ダケには雪がつもっていますから、とちゅう、気をつけていってください。」という意味でした。わたしは、そのわかりづらいてきせつな注意に、もちろん感謝しました。

「ダケ」というのは、秋田県の中央やや東よりにある、森吉山のことです。森吉山のふもとにすむ人人は、「森吉山」とよぶことはめったになく、いつも「ダケ」としたしみをこめてよんでいます。

遠いむかし、将軍坂上田村麻呂（七五八～八一一年）が、戦勝を祈願して、森吉山に薬師如来をまつった、という伝説がこの地方につたわっています。長い歴史をつうじて、この土地の人々は、ダケに薬師如来がすんでいるとしんじて、ふかく信仰してきました。

むかし、信仰の山のほとんどは、女性はけがれているなどという理由で、女性の登山を禁じていました。ダケも、やはり女性がのぼることのできない山でした。ある場所から上は神域で、女性がそこにはいりこめば、山の神がいかって、おそろしいたたりがあるとしんじられていました。戦後になって、そういうへんけんもめいしんもなくなり、女性も自由にこの山にのぼれるようになったそうです。

じつのところ、こんどの旅行では、ダケにのぼる予定など、ぜんぜんありませんでした。ところが、きのう、阿仁合線の電車の窓から見た、森吉山の白い優美なすがたに感動して、ひきよせられるようにきてしまったのです。

旅行の目的は、すぎの原生林を見ることです。

小さいころからすぎの木がすきだったわたしは、三日前、秋田県出身の友人から、耳よりな話をききました。

「小又川のおくに、まだ一度もきりたおされたことのない、すぎの原生林があるらしい。」

わたしは、仕事がひまなのをさいわいに、いそいでしたくをととのえて旅に出たのです。

すぎの学名（動物や植物にラテン語でつけられる、世界共通の名まえ）は、「クリプトメリア＝ヤポニカ」といい、「日本のすぎ」という意味です。文字どおり外国にはない、日本固有の木です。

その葉は、おせんこうの材料につかわれて、天上の霊に、おせんこうをそなえる人のかなしみを、むらさきのけむりにつつんではこびます。また、薬学の発達していなかったむかし、すぎの葉はひふ病の薬としてつかわれ、人々のきずをいやしてきました。

すぎの幹はまっすぐで、良質の材木としてあらゆる建築になくてはならない木です。それに、木材のかおりがよいため、日本酒の酒だるにはすぎの木がかならずつかわれます。

わたしの子どものころは、すぎ鉄砲であそんだり、木の皮をはいで、むちやはちまきのかわりにしてあそんだりしたものです。高く、まっすぐにのびた、堂々たるすがたがすきでしたし、（大きくなったら、あんなふうになりたいな。）と、すぎの木のたくましさ、力強さに、あこがれたりもしました。

様田の宿の主人に、原生林の場所をたずねると、「くわしくは知らない。ダケのむこうがわの打当へいけば、山にあるきなれたマタギ（りょうし）がいるから、正確な場所がわかるのではないか。」とすすめてくれました。わたしは打当へいくことにしました。

ダケの南がわにある打当へは、電車やバスにのりついでいかなければなりません。山また山のいちばんおくまった村のため、バスの本数もすくなく、朝早く様田を出ても、打当につくのは、夕方ぐらいになってしまいます。

わたしは思いました。

（雪の森吉山をこえて、暗くなるまでに打当へおりられないものだろうか。もしダケごえができたら、どんなにすばらしいだろう……。）

「ダケさ雪、三度ふったども、まだだいじょうぶだべしゃ。ああ、打当さ夕方までにいけるでやあ。」

ダケにくわしい宿の主人のことばに勇気づけられて、ダケごえをすることにきめたのです。

あまり長く休むとかえってつかれがまして、長時間の山あるきができなくなります。うつくしいからまつの林にじっとすわっていたい気持ちをおさえて、またあるきだしました。

広々とした、すすきの原に出ました。すすきのほに銀色のかがやきはすでになく、つやがきえて、かれる寸前のさびしい風景です。強い風にあおられて、すすきの原は、大海の波のように大きなうねりをくりかえしています。

すすきの原をすぎると、あとはいけどもいけども、すっかり葉をおとしてしまった、ぶなの林ばか

りでした。

ふかい谷をのぞむ場所に出ました。

（あっ、小鳥のむれだ！）

数百羽の小鳥が、谷をのびのびと群舞している壮観に、わたしの心はおどりました。

ところが、それは、かれ葉だったのです。中空にまいあがったぶなのかれ葉が、谷底からふきあげてくる風に急上昇し、横からの風にあおられ、みねからふきおろす風に急降下するというように、複雑な気流にのって、まるで生きもののように見えたのです。

宿の主人がおしえてくれた二本杉のそばをとおりすぎ、やがてぶなの林の中をしずかにながれる祓川につきました。とけいを見ると、十時をすこし回ったところです。

森吉山は、まだはるかに遠くそびえ立っていて、千五百メートルの山のすそ野にしては、あまりの広大さにおどろかないわけにはいきません。

はば二メートルほどの祓川は、すみきったつめたい水がながれ、口にふくんだとたん歯にしみわたる、ひじょうにおいしい水でした。

わたしは川のほとりで休みながら、いぜんよんだ菅江真澄（一七五四～一八二九年）の紀行文の記事を、なつかしく思いうかべました。

江戸時代の後期に生きた菅江真澄は、しょうがいのほとんどを、東北・北海道などの旅にすごした旅行家で、森吉山には二度のぼっています。真澄の二度めの登山は、「みかべのよろい」という紀行文の中にしるされていますが、かれは、様田からのぼりました。つまり、わたしのたどってきた道は、真

澄が約二百年前に案内人といっしょにあるいた道なのです。

かれらは、山の神のいかりにふれないよう、においのする野菜や魚などいっさい口にしないで精進し、口をすすぎ、手をあらってから、様田の鳥居をくぐりました。そして、この祓川につくと、ささごりをし、身をきよめて森吉山にのぼったのです。

ささごりというのは、水ごりをかんたんにした方法で、ささを水にひたし、葉についたしずくを体にふりかけて、けがれをはらうことです。

（神や仏の実在をしんじたむかしの人々と、なにもしんじられなくなった現代人と、いったいどちらがしあわせなのだろうか……。）

そんなことをとりとめもなく考えました。

祓川をわたると、道はきゅうにけわしくなり、雪がまばらに見えはじめました。それから十五分ものぼると、地面はまったくかくれてしまい、あたり一面のまぶしい雪げしきになりました。

むねをこすりそうなきゅうな山道は、雪に足をすくわれて時間ばかりがすぎていきます。筋肉はつかれ、息ぐるしさもまして、あせるばかりです。人の足あとはまったくなく、くまの足あとがいたるところについています。

（ささごりをとってくればよかったかな。）

不安な気持ちになって、くまに出くわさないようむねのうちでいのりました。

ひどいつかれに立ちどまって、ふと顔をあげると、こい緑色の葉の上に、やわらかく雪をのせたこめつがの木が、まるでクリスマスツリーのようにしずかに立っています。いつのまにかぶなの林はお

わって、こめつがの林にはいっていました。

森吉山は三つのみねからなりたっています。一ノ腰（一二六四メートル）、前岳（一三〇八メートル）、そして主峰の森吉山（一四五四メートル）です。

わたしはやっとの思いで三峰の一つ、一ノ腰にたどりつきました。東南の方角に、たとえようもなくうつくしい森吉山をまぢかにながめられます。まぢかといっても、直線距離にして、二キロメートルははなれているでしょう。

三つのみねは、起伏のゆるやかな尾根でつながり、一ノ腰からちょうど三日月のように、右から左へぐるっと大きな弧をえがいてならんでいます。前岳は、その三日月形のほぼまん中に位置しています。

森吉山のなだらかな斜面は、山頂からおうぎをひらいたように北にむかって広く大きく広がり、前岳と一ノ腰からのきゅうな斜面をしっかりとささえます。おうぎ形の斜面の先は、巨大なシャベルでそぎとられたように、きゅうな角度で連瀬沢におちこんでいます。ダケの広いなだらかな斜面は針葉樹におおわれ、緑の葉に雪が点々とつもって、びみょうなまだらもようをおりだしています。

連瀬沢からふきあげてくる疾風が、あたりのくまざさの葉をふきちぎろうとでもするようにふきあれ、風のうなりはうずをまいてこまくをたたきます。

（いけないな。）

とけいは、もう十二時を回っています。宿の主人は、ダケまで三時間といいましたが、もう四時間以上もたっています。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com